

歌集『海の琴』を読んで

この歌集は、晩鐘叢書第四編として、「準平原」(金子美代子)「陰もつ透明」(青山麿子)「柚子の香」(神根福子)「かなしき地熱」(橋本味佳枝)「雪の響」(松木田迪子)の五編を収載し、それに小川二郎氏の序文、森田良正氏の後記を加えて一卷と成している。合同歌集としては、全社的なものが前に一回出た由であるが、今回のものは人数が五人にしぼられ、歌数も一人約百四十首にもなほり、それぞれの歌風や傾向もじゅうぶんうかがえるようになってゐる。この五人は、おそらく女流としては晩鐘社を代表する人たちであろうが、女流に限られた点にも特色がある。それにこのような形の歌集は、比較対照という方法によって、それぞれの個性を浮き出させることにもなり、読者にとっても好都合である。

この歌集を読んで感ずることは、五人が五人なりに、それぞれの個性を存分に發揮しながら、そこに共通に見いだされるものは、女のいのちの悲しさということである。こういう言い方は唐

突のようであるが、女性の運命と短歌との結びつきの自然さが、かえってそれを私に感じさせるのである。

和泉式部は歌のことを「はかなきこと」といったし、石川啄木も「悲しき玩具」といっている。女性と男性と、古代と近代との違いはあるとしても、歌にかけられた思いには共通のものがあつたことを知る。しかし女性の祈念や悲傷が、三十一音の短詩型に表象の道を見いだすとき、そこには男性以上に自然さが感じられる。その自然さのなかに、女性のいのちが美しい響きをあげており、その響きはやがて万人の心をうつつ力を發揮してくる。このような短歌のもつ秘密に、女性は男性よりもはるかに敏感であつたようだ。

とどかさる夢展けゆく如くにてデパートの鉄扉ゆるやかに上る（金子）

雲のなき空につながる思ひにて莖ながく切るガーベラの花（青山）

エプロンのポケットの手紙幾度か掌に触れて今日をいそいそと居り（神根）

未来など語り得ぬ吾らの逢ひの日よ泌み入るばかり蝉が鳴き鳴く（橋本）

卒業生送りし宵はたんねんにマニキュアぬりて灯にすかしみる（松木田）

以上は任意の抄出によるものであるが、そこにはすでに、硬質的で奔放な歌柄（金子）、鋭角的で透명한感性（青山）、柔軟で清純な抒情（神根）、終末意識に色どられた哀切な相聞（橋本）、

形質相和の淡々たる歌境（松木田）と、好もしい特性がはっきり見られる。そしてこれらの属するそれぞれの集の底には、やはり争えぬ女のいのちのうずきが、共通に感得されるようである。

（昭和三十八年五月）